Osaka University Knowledge Archive

Title	勅撰和歌集における「わび」「さび」「あはれ」：データマイニング手法を用いた分析
Author(s)	岩井,茂樹
Citation	間谷論集. 2025, 19, p. 72-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101086
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈研究論文〉

勅撰和歌集における「わび」「さび」「あはれ」

——データマイニング手法を用いた分析——

岩井茂樹

〈キーワード〉 勅撰和歌集　わび　さび　あはれ　データマイニング

一．はじめに

「わび」「さび」「幽玄」「あはれ」などは諸書で「日本的美的概念」だとされてきた。代表的な古典に大西克礼（一八八八～一九五九）の『幽玄とあはれ』（岩波書店、一九三九年）や、『風雅論「さび」の研究』（岩波書店、一九四〇年）などがある。これらは筆者も編著者として関わった『わび・さび・幽玄――「日本的なるもの」への道程――』（水声社、二〇〇六年）で示したように、中世美学の見直し、文化史の興隆などの学問的背景がありながら、その実、日本人が「日本的なるもの」を作り、またそれを自分たちのアイデンティティーの一部とする動向の中で生まれたものであった。その結果、こうした美的概念が西洋美学にも比定されるものであることが示されると同時に、その副産物として「あはれ＝源氏物語」「わび＝茶の湯＝千利休」「さび＝俳諧＝松尾芭蕉」「幽玄＝能楽＝世阿弥」と

いう等式がほぼ成立してしまった。その後、今日まで基本的にこの等式は変わっておらず、それを基にした研究がなされてきたという実情がある。

言うまでもなく、その中には非常に有益な研究もあるが、反対に定義やその蓋然性の検証すらないまま論じられたものも決して少なくないのもまた実情である。

この辺りで「わび」とは何か、「さび」とは何か、「あはれ」とは何か、ということを辞書とはまた異なる方法で調べてみる必要があるのではないだろうか。そうした作業によって、辞書では確認できなかった意味や特徴などが、もしかすると浮かび上がる可能性があるからだ。

そのため、まず辞書でこれらの語について確認しておく必要がある。今回は和歌を対象としているので『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店）を用いてその意味を確認してみよう。ただし、煩雑さを避けるため、用例は省略する。

まず「わび」から（用例は除く、以下同じ。）「わび」は「わぶ」の連用形であるから、「わぶ」の項から引こう。

> 激しい恋の嘆きや苦悩の末に、気力が萎えて沈み込む状態を示すのが原義。（中略）思いが叶わぬための落胆や、耐えがたい悲嘆に打ちひしがれた状態が強調されることも多い。しばしばほかの動詞と結び付いた形で用いられるが、「思ひわぶ」「恋ひわぶ」「待ちわぶ」「ながめわぶ」などは、その行為がひどく辛いもので苦しく耐えかねる、の意味で詠まれる。用例の大半は恋歌であるが、（中略）世の中や憂き我が身への嘆きや屈託した感情を詠む例、また（中略）落剝したみすぼらしいありさまを示す場合もある。八代集では『後拾遺集』から『詞花集』にかけて用例が減少するが、『千載集』以降、ふたたびよく用いられ、「せきわぶ」「ふしわぶ」「わけわぶ」「さえわぶ」などの複合動詞が現れる。「わぶ」がある行為をしあぐねて難渋する困惑・苦しさを示す例は、（中略）三代集から散見されるが、『千載集』『新古今集』以降は、（中略）この意の割合がやや増加する。[1]

ここからわかるように、原義は恋の嘆きからくる沈んだ状態のことであった。『後拾遺和歌集』以降、減少するが『千載和歌集』や『新古今和歌集』などで複合動詞として再び用いられるようになったようだ。

次に「さび」に移ろう。「さび」は「さぶ」の項がないので「さびし」で引くことにする。

本来あるべきものが失われたために起こる満たされない心情をいう語。（中略）平安以降にも「さびし」は多く詠まれた。（中略）人気のない心細さを否定的にとらえるのではなく、さびしさによって景物の情趣をより深く味わおうとする態度が現れる。中世的美意識に繋がる「さびしさ」への傾斜・愛着は平安後期以後に流行した山里趣味とあいまって、「さびし」の使用を増大させる。（中略）秋・冬の歌に用いられて、月・風・鹿の声・雪・水音に哀感を催させる作がほとんどだったが、（中略）特定の景物に触発されるのではない、寂寥感・孤独感が抽象的な心情としてとらえられており、「さびし」の境地に対する態度が深化していったことが窺わせる。[2]

これは本来あってしかるべき物が何らかの事情で失われた時の満たされない気持ちを表現するのが原義であった。それがやがてそうした心情をしみじみと積極的に味わおうという態度が現われ、それがやがて中世的美意識に繋がったとする。もともとは秋と冬の歌で特定の景物と共に詠まれることが多かったが、やがて特定の景物からは離れていくことになるという。

最後に「あはれ」はどうか。

心の底からの感動を表す言葉。感動詞・名詞・形容動詞として用いられる。感動が自然に嘆息の声になって表れた感動詞が本来の用法。その感情内容としては、賛嘆・感動・親愛・同情・共感・愛惜・哀傷などが見られるが、さまざまな意味があるというよりは、特定の感情として言語化される以前の、肉体の奥底から湧き上がって

くるような情動がそのまま表れたもの、というべきであろう。（中略）平安文化最盛期の女流作家たちは、この「あはれ」の心情を深く切実に受け止めた。（中略）こうした「あはれ」は中世へと至るにつれて、哀感を主体とするようになり、そして広い意味での思想的な深みをもつようになる。[3]

これはかなり強い言葉である。心の底からの感動を表す言葉であるからだ。肉体の奥底から沸き起こる情動がそのまま表れたものだというのである。

さて、ここまで辞書的な意味を確認してきたが、本研究では、主に二つのことを行う。一つは、勅撰和歌集という同じ母集団を用いて、和語である「わび」「さび」「あはれ」という語の関連語が用いられた和歌を抽出し、そこから見えてくる各語の特徴を明らかにすることである。もう一つは、いわゆる八代集と十三代集の間に何らかの違いが見出されるかを、データマイニング手法を用いて比較検討することである。これらの作業によって、勅撰和歌集における「わび」「さび」「あはれ」の特徴が従来よりも明らかになると期待される。

二．部立の出現比率の比較

まず勅撰和歌集から「わび」「さび」「あはれ」の関連語を使用した和歌を抽出した結果、「わび」が四一四首、「さび」が二八三首、「あはれ」が七五五首抽出できた。

以下、これらの和歌を対象にし、順次分析をおこなうことにする。

表1は部立による出現比率比較である。ここではスペースの問題と、分かり易くするために部立をあえて四季の場合は「春」と「夏」を一つに、また「秋」と「冬」を一緒にしてある。さらに「恋」と「哀傷」も「人事」としてまとめた。

表1からわかるように、「わび」では恋や哀傷などの「人の気持ち」を直接詠んだ歌、とりわけ「恋」の歌が多いことがまずわかるだろう。これが「わび」の歌の最大の特徴である。

では、「さび」はと言うと、「わび」と反対に「恋」の歌はほとんど見られず、「四季」や「雑」の歌が多くなる。とりわけ「秋」と「冬」の歌が多いのが注目される。

「あはれ」は恋や哀傷などの「人の気持ち」を直接詠んだ歌と「雑」の歌が多く、「四季」の歌は「わび」と同程度である。

表1　部立による出現比率比較

	春・夏	秋・冬	恋・哀傷	雑
わび	6.1%	12.1%	52.0%	13.5%
さび	6.7%	39.7%	3.9%	39.7%
あはれ	5.9%	16.1%	33.0%	33.7%

三．歌人について

出現する和歌の作者を、男性、女性、僧侶、よみ人知らずの四種に分けてみた。表2はその結果である。

表2からわかるのは、まず「わび」の「よみ人知らず」の数値が高いことである。と同時に「さび」や「あはれ」と比べて僧侶の歌が少ないこともわかる。「あはれ」は女性歌人が他に比べて多い点が特徴である。

表2　作者の比率

	男性歌人	女性歌人	僧侶	よみ人知らず
わび	62.1%	13.5%	9.9%	14.5%
さび	66.8%	15.2%	13.4%	4.6%
あはれ	57.9%	28.4%	13.4%	5.8%

これは全体（「わび」「さび」「あはれ」を合わせたもの）になるが、抽出された歌の多い順に並べると次のようになる（一五首以上のものを掲出）。

藤原俊成　：二九首
西行法師　：二七首
紀貫之　：二一首
藤原定家　：一七首
従三位為子：一七首

藤原家隆　：一五首

二位に僧侶である西行法師が、四位には女性歌人である従三位為子が入っていることがわかる。また紀貫之と従三位為子を除けば後は『千載和歌集』から『新古今和歌集』時代の歌人である点が看取できる。

従三位為子は一般にはあまり知られていない歌人なので、人名辞典で確認しておこう。

?―? 鎌倉時代の女官、歌人。京極為教の娘。伏見天皇に信任され、弟の京極為兼とともに京極派の有力歌人として活躍。勅撰集には120首余がはいっている。正和4年（1315）以後に死去。大宮院権中納言、院大納言典侍、従二位為子などとよばれる。名は「ためこ」ともよむ。家集に「藤大納言典侍歌集」。[4]

京極為教（一二二七～七九）の娘で伏見院（一二六五～一三一七）に信任された京極派の歌人である。「あはれ」という語を詠みこんだ歌が多い事から、『玉葉和歌集』と『風雅和歌集』に多く載せられた結果であろう。

四．勅撰和歌集による違い

表3は各勅撰和歌集で、どのくらい差があるかを見たものである。

「わび」は『後撰和歌集』で極端に多く使われ、その後はかなり低調なところで安定している。これは先に確認した辞書でも触れられていたことである。有吉保氏も言うように、『後撰和歌集』は、「恋歌の勅撰集」と呼ばれることもあるくらい恋歌的色彩の強い歌集だからだろう[5]。

それに対し、「さび」や「あはれ」はほぼ増減が類似している。三つのピークが見られるが、それは『新古今和歌

集』前後、そして『玉葉和歌集』と『風雅和歌集』の箇所である。よく知られているように、後二者は二条派の歌人ではなく、京極派の歌人が中心となって撰した集である。ここに「さび」と「あはれ」がよく使用されている様がわかる。したがって、これを二つのピークと見なすことも可能であろう。一つは『新古今和歌集』前後の歌集、そして京極派が撰した歌集というように。

ただし、注意しておきたいのは、「さび」という言葉は『詞花和歌集』や『続後撰和歌数』、そして『続拾遺和歌集』では一首も見られないことだ。この理由はわからないが、『詞花和歌集』の歌数が少ない事は一つの要因であろう。また、有吉保氏が指摘しているように、

> 詞花集の撰者は、この「ざれ歌」を歌風の根本に据えることを意図していたとみられ、これは従来の勅撰集には見られない新しい世界であった。[6]

という「ざれ歌」中心主義が影響したものかもしれない。つまり、少し深刻な歌は全体的に避けられた結果なのかもしれないのである。

その他二集では単に好まれなかっただけなのか、あるいは何か理由があるのか、今はまったくわからないので、ここでは指摘だけにとどめておく。ただ、『続拾遺和歌集』には、次のような説明がある。

> この集は、「鵜舟集」との異名をもっていた。『井蛙抄』に「続拾遺をば『鵜舟集』と云ふ。かゞり多く入りたる故也。（中略）」とある。篝火を焚いて市中の治安を維持する武士の歌が採られたからであろう。北条一族の政村、泰時、時村や為氏の母の実家の宇津宮一族の蓮生、景綱、時朝、親朝など、確かに多数の歌が採られている。[7]

武士の歌を多く採録した結果、生じた現象なのだろうか。今後の研究を待ちたい。

五．その他の特徴

その他、和歌の抽出の際に見えてきたことを記しておこう。

まず「わび」について。「わび」はどうやら普段の生活、つまり日常生活や俗世で感じる感情であると思われる。特に恋の歌で詠まれたことを考えると、恋の諸段階で感じる感興であろう。相手の不在を実感したときに感じるものであるが、それは決して不可逆性を持つものではなく、戻ることのできる可能性を残した時に感じるものである。したがって、「わび」自体は一時的であるといえる。「わびつつ」や「わびぬれば」となって初めて長い間、「わびた」状態が続くのである。先に一時的と述べたが、その証拠に「夢」の歌が多く見られるのも特徴の一つである。

次に「さび」であるが、こちらは僧侶の歌が多かったこともあるのか、人里離れた場、つまり山里や古里など遁世的な場で感じる感興である。以前には確実に存在したものを惜しむ気持ちが強く、それを失ってしまった状態を何かのきっかけで強く実感する時に「さび」が用いられるようだ。興味深いことに、ここには「涙」を詠みこんだ歌は一首も見られない。当然、その縁語である「露」を詠んだ歌も皆無である。「さび」はもう戻る事ができない半永久的な不可逆性を含んでおり、そのためか「夢」を詠みこんだ歌もほとんど見られない（二首のみ）。この辺りが「わび」とは大きく異なる点である。もう一点だけ加えておくと、「うらみ」が詠みこまれない点も「さび」の特徴の一つである。

「あはれ」は、「わび」や「さび」ほど明確ではない。「あはれ」が「わび」や「さび」を含むものであるとも言えようか。いろんな箇所や場面で感じるものだ。ただ違うのは一瞬で涙が出るくらい深く強い感情である点である。

「わび」や「さび」、特に「わび」では長い間「わびた」状態だと涙が出るようだが、一瞬感じる「わび」の気持ちだけでは「涙」は出ない。だが、「あはれ」は違う。「あはれ」を感じた途端、「涙」が出る事があるのである。それと関係してのことだろうか。神も「あはれ」に感応することがある。神は「あはれ」を知る存在であり、人は神に「あはれをかけよ」と祈るのである。「あはれ」は神からもたらされると考えられていたのかもしれない。したがって、「あはれ」を詠みこんだ歌には「神祇」の歌が多く見られる。これが「あはれ」の最大の特徴である。

六．データマイニングによる分析結果

表4～6は、それぞれ勅撰和歌集から抽出した「わび」「さび」「あはれ」をKHコーダにかけ、共起ネットワーク図として示したものである。

表を比較してみると、「わび」に関わる語には、恋の歌によく用いられる語が共起していることがわかる。例えば、「逢」「夜」「夢」「待つ」「なく」「寝る」「見る」「音」などがそれに当たる。「東路の佐夜の中山なかなかに逢ひ見て後ぞわびしかりける」（『後撰和歌集』巻第九・恋一・源宗于（むねゆき））や、「夢よ夢恋しき人に逢ひ見すな覚めての後にわびしかりけり」（『拾遺和歌集』巻第十二・恋二・よみ人知らず）などがその代表例であろうか。

それに対して、表5の「さび」の場合は、「山里」「秋」「夕暮れ」「木枯らし」「吹く」「宿」などが共起している。「訪るる音になかなか山里のさびしさ勝る夕時雨かな」（『続古今和歌集』巻第八・釈教・思順上人）や、「嵐吹き籬の萩に鹿鳴きてさびしからぬは秋の山里」（『玉葉和歌集』巻第四・秋上・藤原俊成）などがその代表として挙げられよう。

表6の「あはれ」では、「思ふ」「恋」「言」などが近い距離にあるのがわかる。「天の川流れて恋は憂くもぞあるあはれと思ふ瀬に早く見む」（『後撰和歌集』巻第五・秋上・よみ人知らず）の歌や、「住吉の神はあはれと思ふらむ空

しき舟をさして来たれば」（『後拾遺和歌集』巻第一八・雑四・後三条院）などが代表例として挙げられる。

データベース作成時には、あまり意識しなかったが、「言の葉」や「言ふ」という言葉が「あはれ」の歌には多く見られたように思う。例えば「恋死なむ身をもあはれと誰か言はむ言ふべき人は辛き世なれば」という『風雅和歌集』巻第十四・恋五に載る西大寺前内大臣女の歌などがその典型例であろう。あるいは「悲しさもあはれもたぐひおほかるを人にふるさぬ言の葉もがな」（『新勅撰和歌集』巻第一三・恋三・謙徳公）などの歌も例として挙げられよう。

七．八代集と十三代集の違い

次に、八代集と十三代集の間に何らかの共通点や相違点があるかどうかを探ってみる。先ほどと同様にそれぞれのデータをＫＨコーダーにかけてみた。

表７が八代集の「わび」に関する結果であり、表８が十三代集の「わび」に関する結果である。同様に表９、10が「さび」に対するもの、表11、12が「あはれ」に対するものである。

非常に興味深いことに、表７は表４と酷似している。つまり、勅撰和歌集全体で出た傾向はすでに八代集に表れていたものであったのだ。逆に表８の十三代集の場合、共起ネットワークの形も線の多さも少なくなる。共起する語も八代集では強かった「逢」という語との関連性が小さくなり、「思ふ」や「恋」などの方が強くなっている。勅撰和歌集で見た「あはれ」（表４）と近いとも言えようか。

次に「さび」の場合はどうだろう。こちらの場合は、八代集で「神さびる」という語が大きな中心群をなしており、この語は「古る」「我」「石上」「恋」などと共起している。だが、十三代集になると、その群は小さくなり、「住吉」「松」「勝る」「夕」などと共起するようになる。神の名が「石上」の神から「住吉」の神に代わっている点が興

味深い。この群に代わって十三代集になると、「寂しい」や「寂」を中心群としたネットワークが形成されるようになる。前者は「秋」「宿」と強い共起関係にあり、後者は「月」「声」「澄む」と共起関係を結んでいるのがわかる。

最後に「あはれ」であるが、「あはれ」の場合も八代集と勅撰和歌集全体ではほぼ同じ形になっている。この点は「わび」と同じである。これが十三代集になると、「見る」「思ふ」「世」「月」などと共起関係を結ぶことになる。

これらの結果が何を意味しているかというと、当然のことかもしれないが、時代によって歌の詠まれ方というか、語の選択が変化しているということである。特に主に平安時代に作られた八代集と、それ以降の集ではかなりの差があるということである。

我々はともすると八代集中心で物を考えがちだが、中世における「わび」「さび」「あはれ」を考える場合には、平安の感覚で臨むべきではないのである。中世は中世の用例を使用して、これらの語を考える必要がある。可能であれば、和歌集ごとにデータ分析を行いたいが、そうするとデータ量が少なくなるので、誤差も大きくなる。したがって、今回は八代集と十三代集の分析にとどめる。

また、ここで見たように、辞書では触れられていなかった共起ネットワークも明らかになった。これは今後の研究に生かせる成果だと思う。

八．おわりに

本稿で明らかになったことは以下の諸点である。

①辞書では指摘されていなかった事実がいくつか明らかになった。例えば「わび」であれば、よみ人知らずの歌が多い点や、「わび」ただけでは「涙」は流さない点などがそれに当たる。「さび」については、僧侶の歌が多い点や、『玉葉和歌集』や『風雅和歌集』などの京極派が撰した歌集で多かった点などが挙げられよう。「あはれ」では、「神

祇」の歌が比較的多いことが発見の一つであった。

②データマイニング手法により、分析したところ、これまで指摘されてこなかった語との関連が確認された。また「わび」と「あはれ」については、勅撰和歌集全体と八代集の共起ネットワークが同じであることも明らかになった。反対に十三代集ではかなり異なる様相を見せていたこともわかった。

こうした方法は他の歌集などにも援用できる。一つぜひとも行ってみたいのが、近世の文化に大きな影響を与えた『類題和歌集』の分析である。これは後水尾院撰の勅撰類題集であるが、茶の湯の歌銘や香道の香銘の典拠となるものである。また近世の歌人たちが作歌の際の証歌検索のために用いたという歌集でもある。この歌集の特徴を同じ方法で分析し、勅撰和歌集の世界と対比させたいと考えている。それによって、中世までの文化の様相と、近世のそれがどのように異なるのか、その一端が明確になることが期待されるからだ。

ともかく、今後もさまざまな方法によって、「わび」「さび」「あはれ」などの語を中心にして、分析と考察を進めていきたいと考えている。

注

1　久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、一九九九年、九八七頁。
2　同前、三八五頁。
3　同前、五〇～五一頁。
4　『日本人名大辞典』Japan Knowledge Lib.
5　有吉保『勅撰和歌集入門　和歌文学理解の基礎』勉誠出版、二〇〇九年、二二頁。

6　同前、五五頁。
7　同前、一〇七頁。

参考文献

（1）有吉保『勅撰和歌集入門　和歌文学理解の基礎』勉誠出版、二〇〇九年
（2）樋口耕一ほか『動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング』ナカニシヤ出版、二〇二二年
（3）末吉美喜『テキストマイニング入門：Excel と KH Coder でわかるデータ分析』オーム社、二〇一九年

イワイシゲキ　（大阪大学日本語日本文化教育センター）

表3　各勅撰和歌集の数的変化

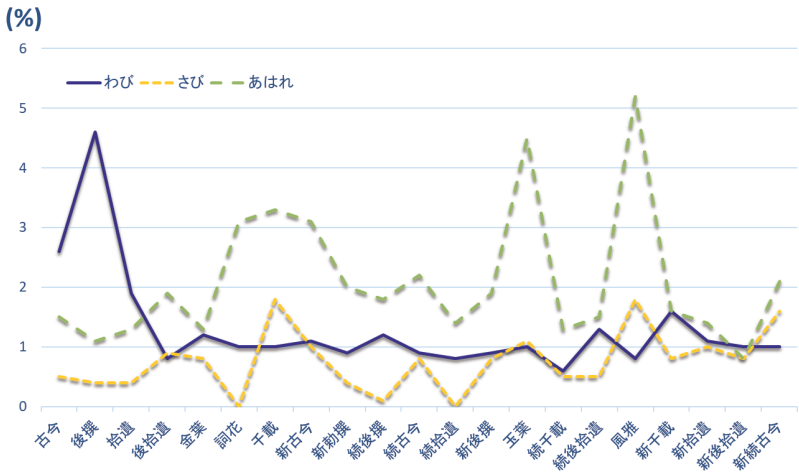


表4　「わび」の共起ネットワーク

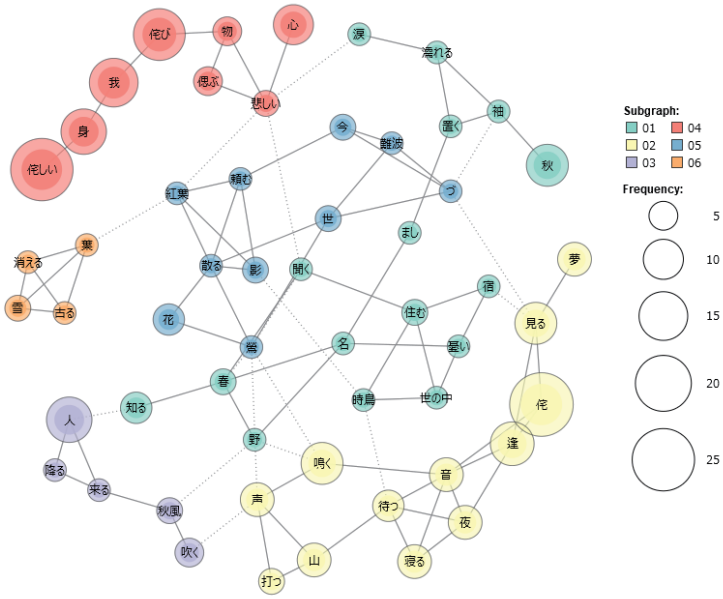


表5　「さび」の共起ネットワーク

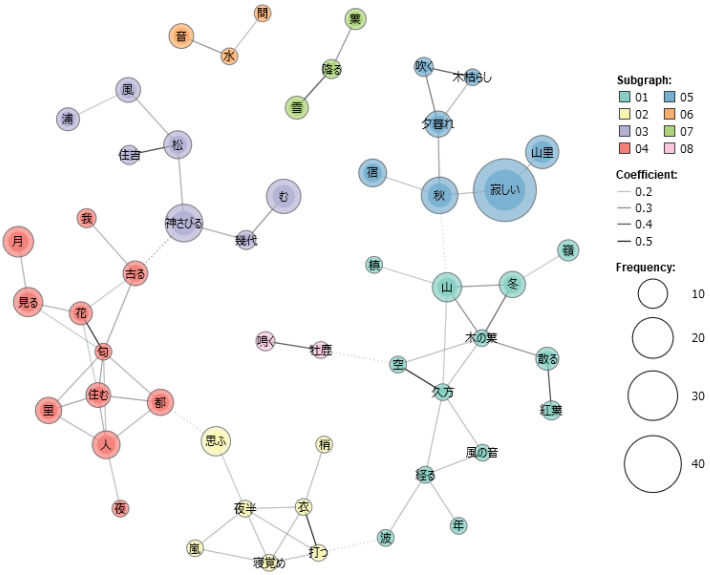


表6　「あはれ」の共起ネットワーク

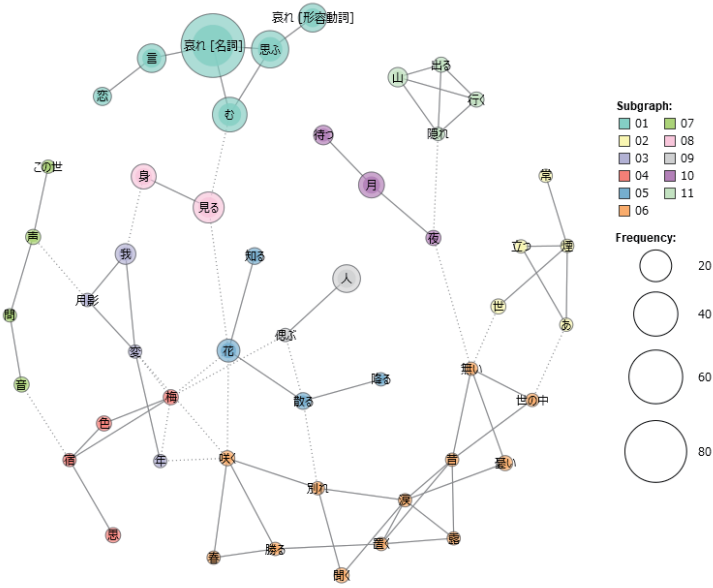


表7　「わび」の共起ネットワーク（八代集）

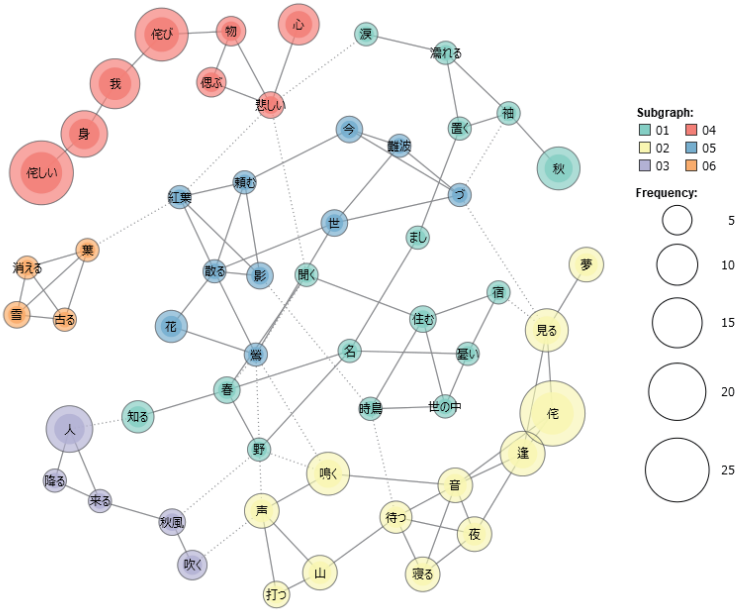


表8　「わび」の共起ネットワーク（十三代集）

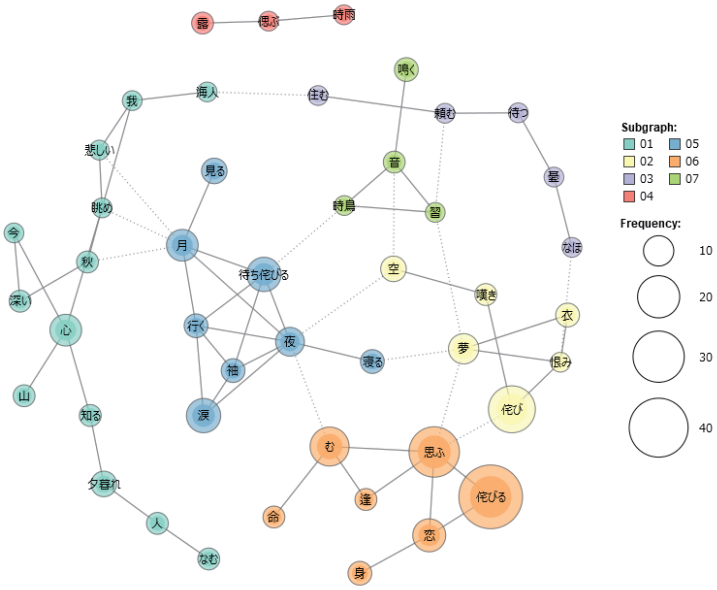


表9　「さび」の共起ネットワーク（八代集）

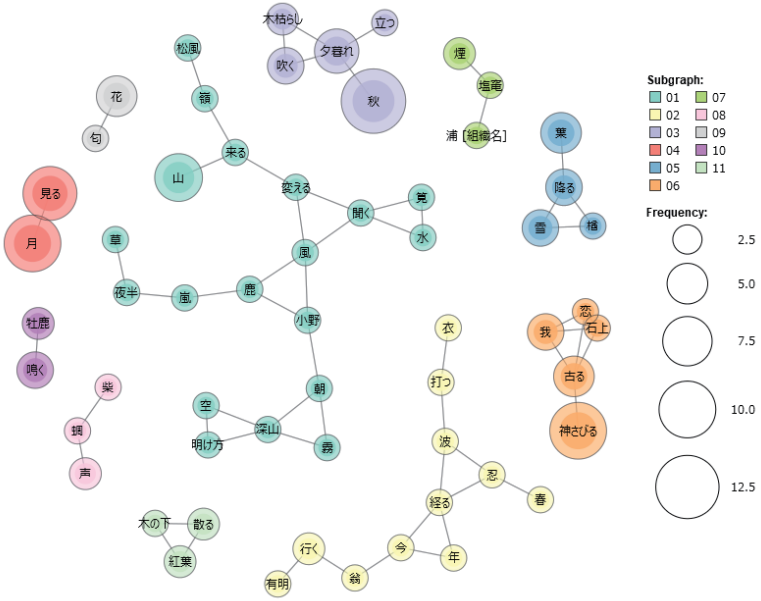


表10　「さび」の共起ネットワーク（十三代集）

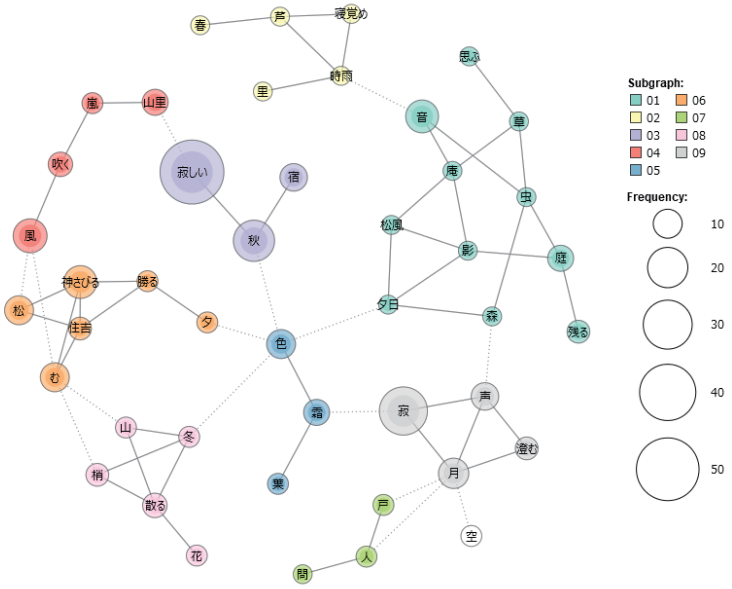


表11　「あはれ」の共起ネットワーク（八代集）

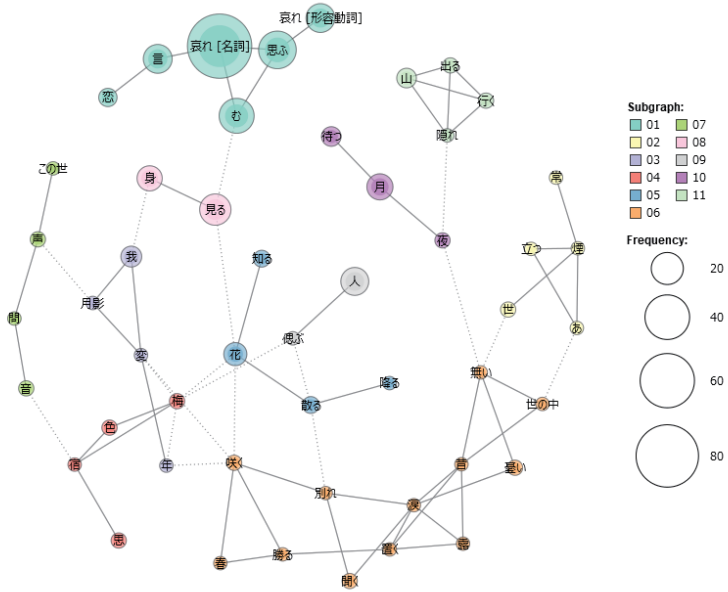
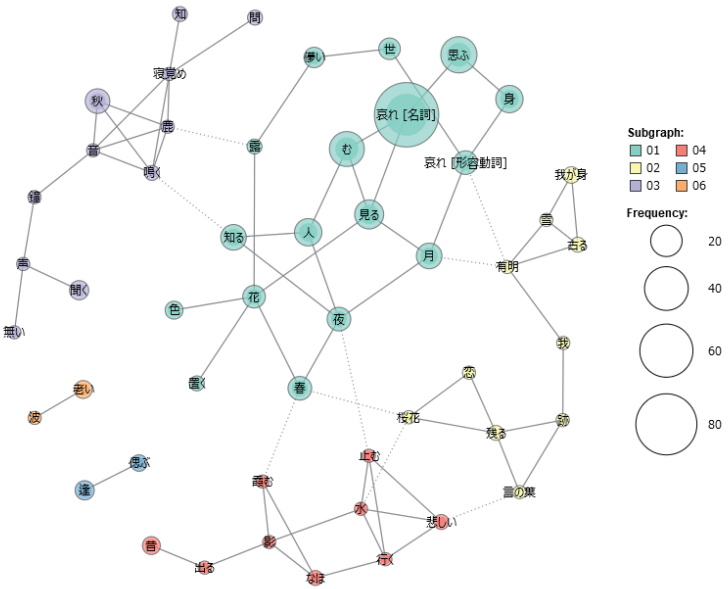


表11　「あはれ」の共起ネットワーク（十三代集）



“Wabi”, “Sabi”, and “Aware” in the Imperial Collection of Japanese Poetry
—Analysis using data mining techniques—

IWAI Shigeki

Words such as “wabi”, “sabi”, “yūgen”, and “aware” have been described as “Japanese aesthetic concepts” in various books. Representative classics include Yoshinori Onishi (1888-1959)'s “Yugen to Aware” (Iwanami Shoten, 1939).

This essay has revealed several facts that were not pointed out in dictionaries. For example, in the case of “wabi”, there are many songs that are unknown to people, and “wabi” alone does not cause “tears” to be shed. Regarding “sabi”, there are many poems by monks, and there are many poems compiled by the Kyogoku school, such as “Gyokuyo Wakashu” and “Fuga Wakashu.” One of the discoveries made in “Aware” was that there were relatively many “Jinji” songs.

When analyzed using data mining techniques, a relationship with words that had not been pointed out before was confirmed. It has also been revealed that the co-occurrence network for “wabi” and “aware” is the same in the entire imperial collection of waka poems and in the Yashiro collection. On the contrary, I found that the thirteenth collection showed a very different aspect.